

# 2021（令和3）年の漁況

安原 豪・寺門弘悦・栗田守人

## 1. まき網漁業

### (1) 漁獲量の経年変化

図1に1960（昭和35）年以降の島根県の中型まき網漁業による魚種別の漁獲量の経年変化を示した。

2021年の総漁獲量は約6万8千トンで、前年（2020（令和2）年）比106%、平年（2016（平成28）年～2020（令和2）年の5ヶ年平均、以下同様）比89%であった。また、CPUE（1統1航海当り漁獲量）は43.9トンで、前年・平年並みであった。（前年比110%、平年比97%）。なお、2021年の漁労体数は10ヶ統（県西部2ヶ統、県東部8ヶ統）であった。

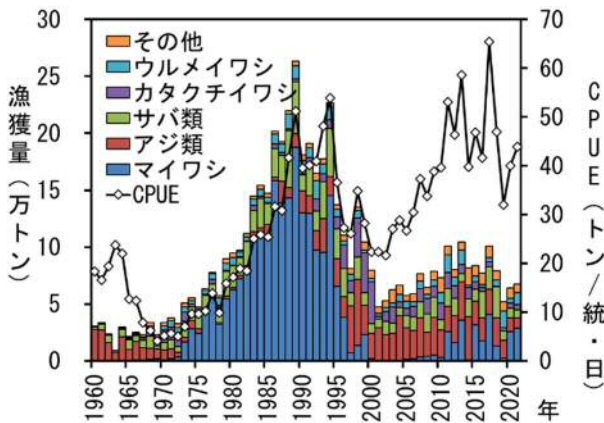


図1 島根県の中型まき網漁業による魚種別漁獲量とCPUEの推移（2002年までは農林水産統計値、2003年以降は島根県漁獲統計システムによる集計値）

本県のまき網漁業で漁獲された魚の主体は、1970年代後半～1990年代前半のマイワシから、1990年代後半にマアジに変遷し、2011年までは同種が主要な魚種となっていた。ところが、2011年にマイワシの漁獲割合が急増し、以後マアジ、サバ類の3種が主要な魚種となっている。魚種別の動向をみると、ウルメイワシ（総漁獲量15%）は前年を上回り、マイワシ（同43%）、サバ類（同11%）、カタクチイワシ（同7%）は前年並み、マアジ（同13%）は全年を下回る漁況であった。

### (2) 魚種別漁獲状況

図2～6に島根県の中型まき網漁業による魚種別月別漁獲動向のグラフを示した。

#### ① マアジ

2021年の漁獲量は約8千7百トンで、前年・平年を下回った（前年比71%、平年比46%）。

漁獲の主体は、1歳魚（2020年生まれ）、2歳魚（2019年生まれ）で、夏季以降は0歳魚（2021年生まれ）と1歳魚であった。山陰沖ではマアジは春から初夏にかけて、まとまって漁獲されるが、4月～7月の漁獲量は約4千トンで前年並みで平年を下回る漁況であった（前年比52%、平年比40%）。また、9月～11月の漁獲量は約2千3百トンで前年を上回り平年並みの漁況であった（前年比186%、平年比84%）。

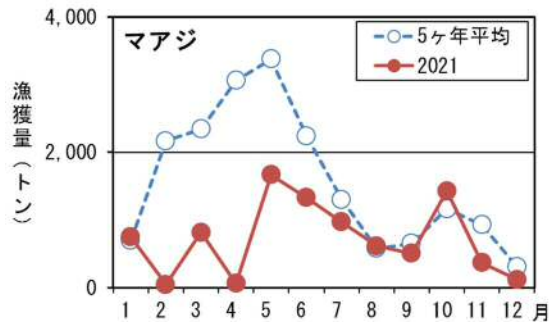


図2 中型まき網漁業によるマアジの漁獲量

#### ② サバ類

2021年の漁獲量は約7千4百トンで、前年並みであった（前年比86%、平年比42%）。

漁獲の主体は1歳魚（2020年生まれ）で、夏季以降は0歳魚（2021年生まれ）も混じって漁獲された。山陰沖ではサバ類の漁獲は例年、9月～翌3月が好調であり、4月～8月にかけては低調となる。本年の1月～3月の漁獲量は約4千2百トンで、前年を大きく上回り、平年を下回った（前年比263%、平年比47%）。また、10月～12月の漁獲量は約1千5百トンで、前年・平年を下回った（前年比70%、平年比49%）。

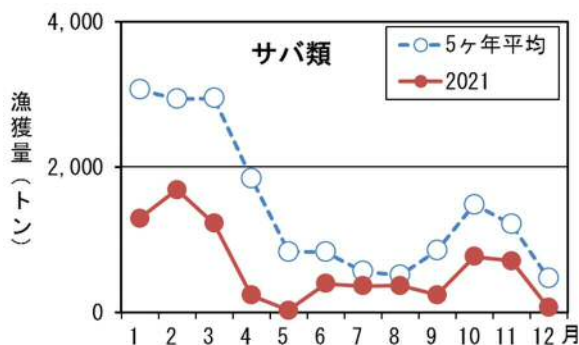


図3 中型まき網漁業によるサバ類の漁獲量

③ マイワシ

2021年のマイワシの漁獲量は約2万9千トンで、前年並みで平年を上回った(前年比112%、平年比145%)。近年の月別の漁獲動向は、県東部を主漁場として3月～6月、9月～10月に漁獲がまとまるが、本年は3月～5月に多く漁獲された。

対馬暖流系群のマイワシ資源は2000年以降低水準期が続いていたが、2011年(県中型まき網漁獲量約2万5千トン)から漁獲量が急増した。2012年以降も約1万5千トン～4万トンの漁獲量が続き、資源量は回復傾向にあると考えられているが、2014年・2019年は低い値となっており、今後の動向を注視する必要がある。

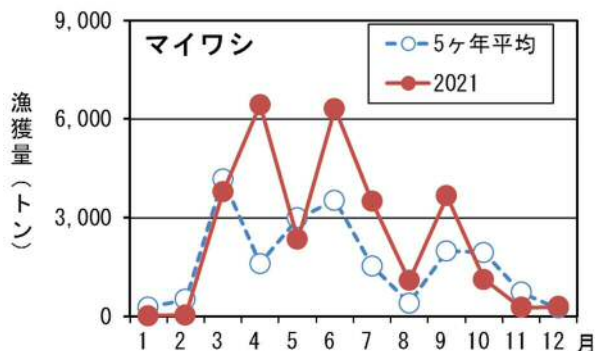


図4 中型まき網漁業によるマイワシの漁獲量

④ カタクチイワシ

2021年のカタクチイワシの漁獲量は約4千6百トンで、前年並みで平年を上回った(前年比102%、平年比152%)。月別の漁獲量の動向をみると例年と同様に8月～10月にまとまって漁獲があった。

⑤ ウルメイワシ

2021年のウルメイワシの漁獲量は約1万トンで、前年および平年を上回った(前年比249%、平年比163%)。近年、ウルメイワシの漁獲量は年変動が大きく令和3年は6月～7月に多かった。

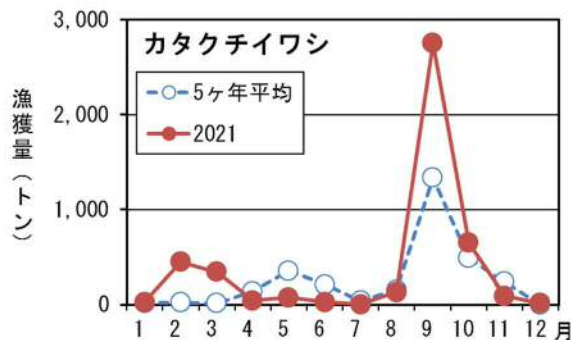


図5 中型まき網漁業によるカタクチイワシの漁獲量

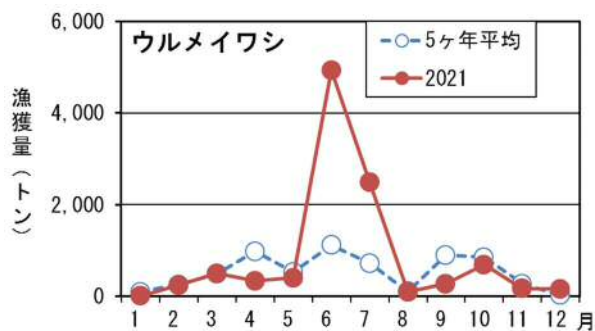


図6 中型まき網漁業によるウルメイワシの漁獲量

2. いか釣り漁業

県内外のいか釣り漁船が水揚げするいか釣り漁業の代表港である浜田漁港(島根県浜田市)に水揚げされた主要イカ類(スルメイカ、ケンサキイカ)の漁獲動向を取りまとめた。対象とした漁業は、いか釣り漁業(5トン未満船)、小型いか釣り漁業(5トン以上30トン未満船)および中型いか釣り漁業(30トン以上)である。

① スルメイカ

浜田漁港に水揚げされたスルメイカの2016年以降の水揚量および水揚金額、単価の経年変化を図7と図8に示した。

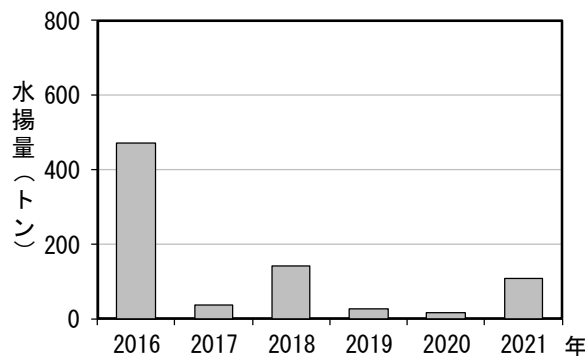


図7 浜田漁港におけるスルメイカの水揚量の経年変化

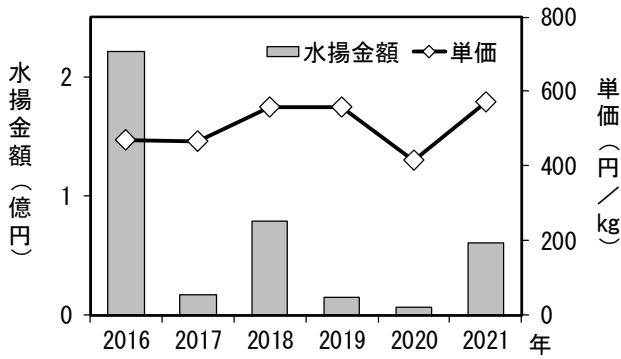


図 8 浜田漁港に水揚げされたスルメイカの水揚金額と単価の経年変化

2021年の水揚量は107トンで、前年(16トン)を上回り、平年(139トン)を下回った(前年比659%、平年比77%)。近年は両系群の資源状態が厳しい状況にあり※、低調な漁況が続いている。

2021年の水揚金額は約6千万円(前年比907%、平年比90%)であった。キログラムあたりの平均単価は571円で、平年(493円)の1.2倍であった。

スルメイカの月別の水揚動向を図9に示した。島根県沖では、例年、冬季から3月にかけて冬季発生系群の産卵南下群が、3月以降は秋季発生系群の索餌北上群が漁獲対象となる。2021年は、3月をピークに2月～5月にまとまった水揚げがあった。

※(国法)水産研究・教育機構水産資源研究所による令和3年度のスルメイカの資源評価では、冬季発生系群、秋季発生系群の親魚量は、MSY(最大持続生産量)を実現する水準を下回るとされている。

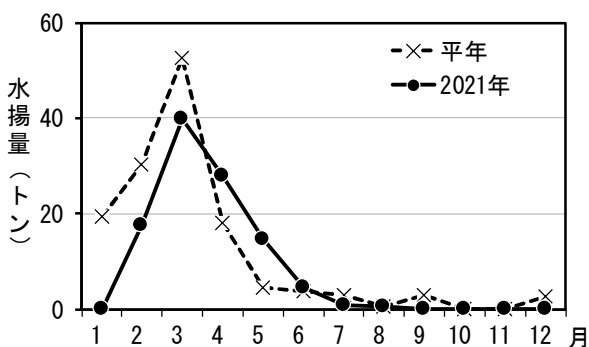


図 9 浜田漁港におけるスルメイカの月別水揚動向(平年は過去5年(2016年～2020年)の平均)

## ② ケンサキイカ

浜田漁港に水揚げされたケンサキイカの2016年以降の水揚量および水揚金額、単価の経年変化を図10と図11に示した。

2021年のケンサキイカの水揚量は58トンで、低調

であった前年(40トン)は上回ったが、平年(142トン)を下回った(前年比146%、平年比40%)。水揚金額は約8千万円(前年比142%、平年比50%)であった。キログラムあたりの平均単価は1,435円で、平年(1,295円)の1.1倍であった。

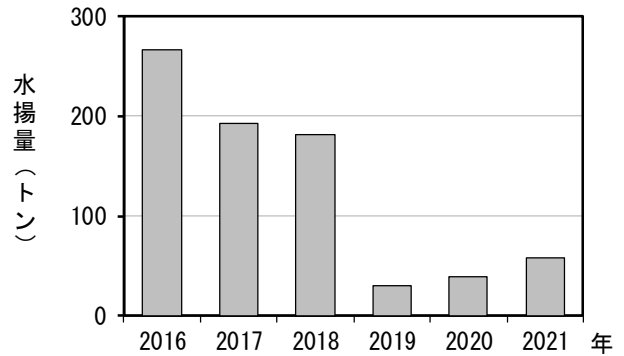


図 10 浜田漁港におけるケンサキイカの水揚量の経年変化

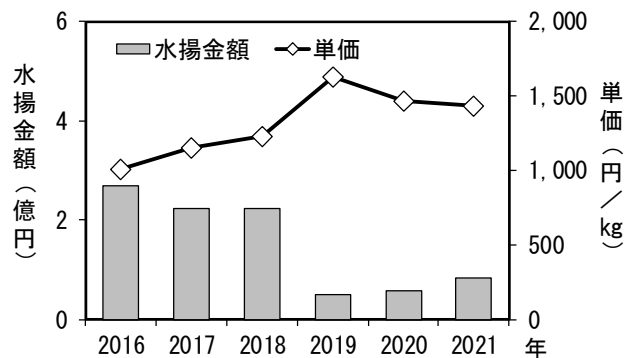


図 11 浜田漁港に水揚げされたケンサキイカの水揚金額と単価の経年変化

ケンサキイカの月別の水揚動向を図12に示した。2021年のケンサキイカ漁は、ケンサキイカ型が主体となる春夏来遊群(4月～8月)は、例年より早めの4月上旬から水揚量が増え始めたが、漁獲量は平年を下回る45トン(平年比86%)に留まった。ブドウイカ型が主体となる秋季来遊群(9月～12月)は平年を下回る10トン(平年比11%)であった。2006年以降、春夏来遊群の漁況が不調である一方、秋季来遊群の漁況は好調である傾向が続いていた。しかしながら、2019(令和元)年から3年連続して秋季来遊群の不漁が続いており、今後の資源動向を注視する必要がある。

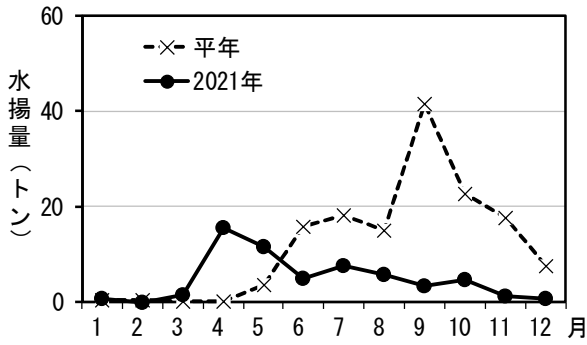


図 12 浜田漁港におけるケンサキイカの月別水揚動向 (平均は過去5年 (2016年～2020年) の平均)

### 3. 沖合底びき網漁業 (2 そうびき)

本県では現在、浜田漁港を基地とする4統が操業を行っている。本報告では、この4統を対象に取りまとめを行った。ここでは統計上、漁期年を用い、一漁期を8月16日～翌年5月31日までとした(6月1日～8月15日までは禁漁期間)。

#### (1) 全体の漁獲動向 (図 13)

浜田漁港を基地とする沖合底びき網漁業(操業統数4統)の2021(令和3)年漁期(2021年8月16日～2022年5月31日)の総漁獲量は2,289トン、総水揚げ金額は14億2,816万円であった。また、1統当たりの漁獲量(以下、CPUE)は572トン、水揚げ金額は3億5,704万円で、漁獲量は平年を下回り、水揚げ金額は平年を上回った(過去10年平均:626トン、3億1,119万円)。

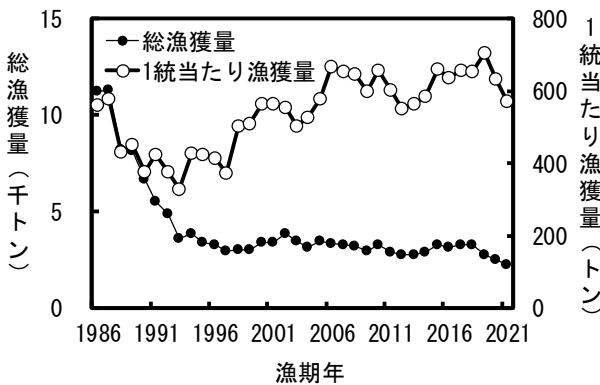


図 13 浜田漁港を基地とする沖合底びき網漁業における総漁獲量と1統当たり漁獲量の経年変化

#### (2) 主要魚種の漁獲動向 (図 14)

##### ① カレイ類

ムシガレイのCPUEは28トンで平年の5割、ソウハチのCPUEは32トンで平年の8割、ヤナギムシガ

レイのCPUEは16トンで平年の1.4倍の水揚げであった。

##### ② イカ類

ケンサキイカのCPUEは27トンで平年の6割、ヤリイカのCPUEは1トンで平年の1割の水揚げであった。

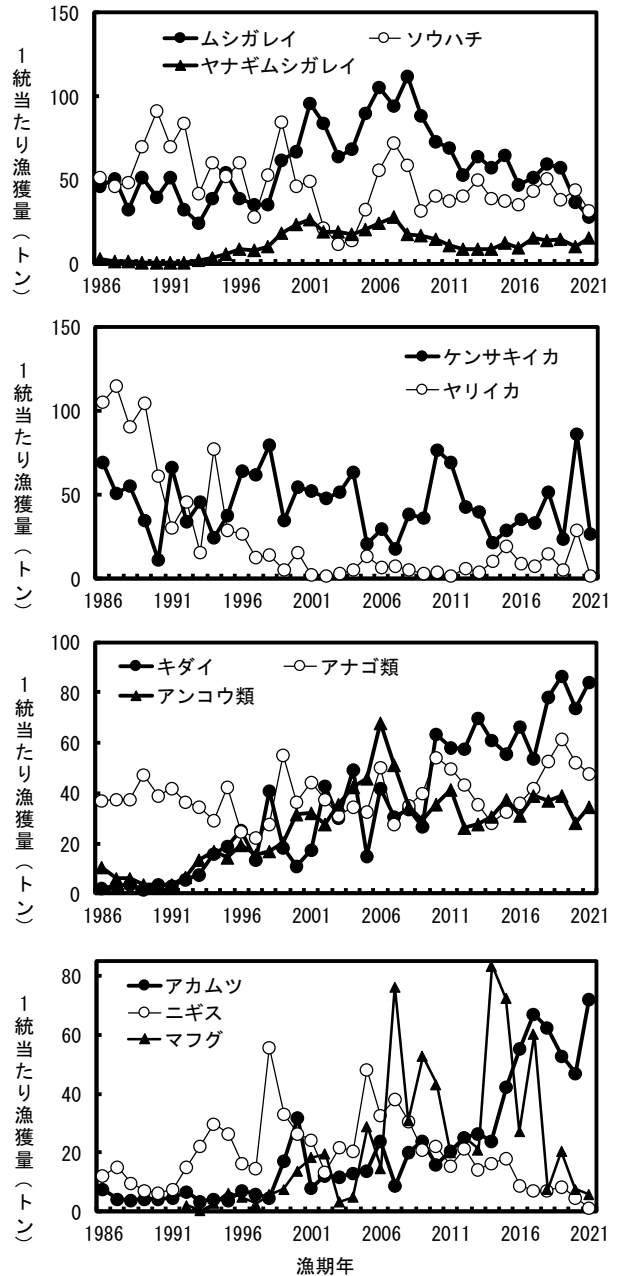


図 14 浜田漁港を基地とする沖合底びき網漁業における主要魚種の1統当たり漁獲量の経年変化

##### ③ その他の魚類

キダイのCPUEは84トンで平年の1.3倍、アナゴ

類のCPUEは48トンで平年の1.1倍、アンコウ類のCPUEは34トンで平年の1.0倍、アカムツのCPUEは72トンで平年の1.7倍、ニギスのCPUEは2トンで平年の1割、マブグのCPUEは6トンで平年の2割であった。

この他、マトウダイのCPUEは38トン(平年の2.0倍)、イボダイのCPUEは11トン(平年の1.9倍)、マダイのCPUEは22トン(平年の1.4倍)、カワハギ類のCPUEは8トン(平年の4割)であった。

#### 4. 小型底びき網漁業第1種(かけまわし)

小型底びき網漁業第1種は山口県との県境から隠岐海峡にかけての水深100~200mの海域を漁場とし、現在38隻が操業を行なっている。ここでは統計上、漁期年を用い、一漁期を9月1日~翌年5月31日までとした(6月1日~8月31日までは禁漁期間)。

##### (1) 全体の漁獲動向(図15)

2021(令和3)年漁期(2021年9月1日~2022年5月31日)の総漁獲量は3,438トン、総水揚金額は15億9,242万円であった。1隻当たり漁獲量(以下、CPUE)は92.4トン、水揚金額は4,278万円で、漁獲量では平年を4%下回り、水揚金額では平年を5%上回った(過去10ヶ年平均:96.0トン、4,060万円)。

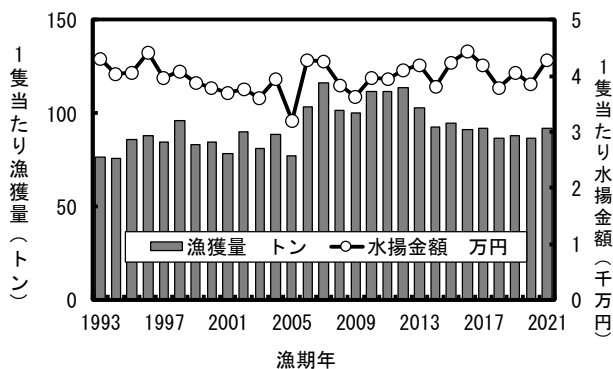


図15 小型底びき網漁業第1種における1隻当たり漁獲量と水揚金額の経年変化

##### (2) 主要魚種の漁獲動向(図16)

###### ① カレイ類

ソウハチのCPUEは16.7トンで、前年の1.1倍、平年の9割の水揚げであった。ムシガレイのCPUEは2.6トンで、前年の1.0倍、平年の9割であった。メイタガレイのCPUEは0.8トンで、前年の1.5倍、平年の1.1倍であった。この他、ヤナギムシガレイのCPUEは1.5トン(平年の1.1倍)、アカガレイのCPUEは5.6トン(平年の9割)、ヒレグロのCPUEは4.7トン(平年の6割)であった。

###### ② イカ類

ケンサキイカのCPUEは0.3トンで、前年の2割、平年の1割の水揚げであった。ヤリイカのCPUEは0.6トンで、前年の1割、平年の2割の水揚げであった。スルメイカのCPUEは2.0トンで、前年の1.9倍、平年の9割の水揚げであった。

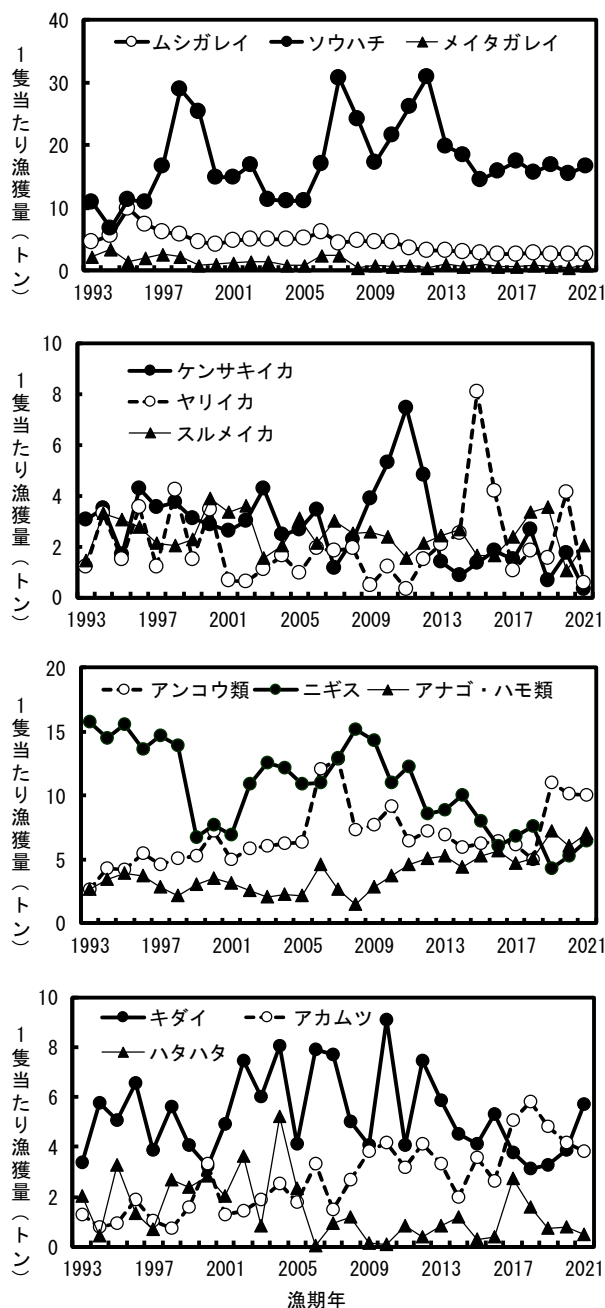


図16 小型底びき網漁業第1種における主要魚種の1隻当たり漁獲量の経年変化

###### ③ その他の魚類

アカムツのCPUEは3.8トンで、前年の9割、平年の1.0倍の水揚げであった。この他、アンコウ類のCPUEは10.1トン(平年の1.4倍)、ニギスのCPUE

は6.4トン（平年の8割）、アナゴ・ハモ類のCPUEは7.0トン（平年の1.3倍）、キダイのCPUEは5.7トン（平年の1.3倍）、ハタハタのCPUEは0.5トン（平年の5割）であった。

### 5. ばいかご漁業

石見海域におけるばいかご漁業は、小型底びき網漁業（第1種）の休漁中（6月～8月）に行われる。漁場は本県沖合の水深200m前後で、2021（令和3）年は3隻が操業した。

解析に用いた資料は、当センター漁獲管理情報処理システムによる漁獲統計と各漁業者に記帳を依頼している標本船野帳である。これらの資料をもとに、漁獲動向、漁場利用等について検討を行った。なお、漁獲量および水揚金額の9割程度占めるエッチュウバイについては、別記のエッチュウバイの資源管理に関する研究を参照のこと。

#### (1) 漁獲動向

2021年の総漁獲量は99.1トン（前年度比144%）、総水揚金額は4,120万円（前年度比119%）であり、いずれも前年より増加した（図17）。1989年（平成元年）の漁獲量は175トンであったが、2005年（平成17年）には100トンを下回った。その後増減を繰り返しながら減少傾向が継続している。漁獲量減少の原因は、操業隻数の減少等が考えられ、平成20年代の始めまでは6隻～7隻が操業していたが、徐々に減少し2016年（平成28年）以降は3隻のみの操業となっている。

水揚金額も漁獲量の減少に伴って低下しているが、2003年（平成15年）～2014年（平成26年）は漁獲

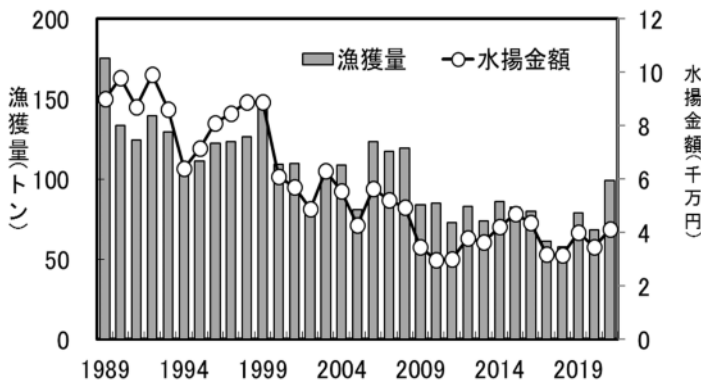


図17 石見海域におけるばいかご漁業の漁獲量と水揚げ金額の推移

の大部分を占めるエッチュウバイの価格が500円/kgを下回った期間であり、その影響も大きいと考えられる。

2021年の1隻当たりの漁獲量は33.0トン（前年

度比144%）であり、これまでの最高であった2016年の1隻当たりの漁獲量26.6トンを超える過去最高の漁獲量であった（図18）。2005年（平成17年）および2009年（平成21年）には1隻当たりの漁獲量が大きく減少したが、平成元年以降は20トン程度で推移している。

1隻当たり水揚金額は1,374万円（前年比119%）であり、近年では2016年に次ぐ2番目に高い水揚金額となった。1989年以降、1隻当たり水揚金額は増減を繰り返しながら減少して、2009年には576万円まで低下した。しかし、2014年以降は回復して、1隻当たり水揚金額が1,000万円を超えている。

漁獲の主体となっているエッチュウバイの資源水準が高いため、1隻当たりの漁獲量および水揚金額はそれを反映して高くなっている。

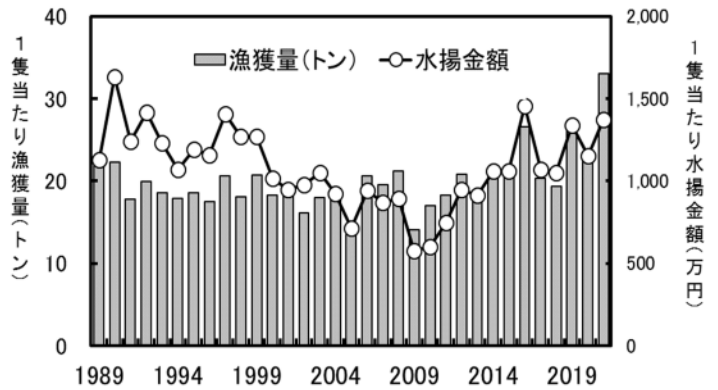


図18 石見海域におけるばいかご漁業の1隻当たりの漁獲量と水揚げ金額の推移